校長室だより～燦燦～ №１９１

自己満足その２

2020.9.14

２校目の中学校時代の生徒たちがクラス会を企画し、私を呼んでくれたことがあった。中には、製本された年間１００号の学級通信『薫風』を手にしている教え子もいた。その教え子から学んだことがある。こちらは、週に２～３回しか出していないのだが、その教え子は、毎日出ていると思い込んでいたのである。「えっ、毎日じゃなかったんですか？」衝撃的な教え子からの言葉であった。「そういうものなのか」と教えてもらった。週に２～３回のはずが、記憶の中では毎日になってしまうのであるからよしとすることにした。

前号で書いた通り、新たな職場である中学校にきて、毎日出すことが決していいことではないとわかった。教師の自己満足に過ぎないのである。確かにりっぱに製本され形としては残る。しかし、教え子たちにとっては、日刊である２０４号よりも２校目の１００号のほうが価値があるのかもしれない。熱心な教師になることは、いいことだとは思うが、相手のことを考えられる「相手意識」がないと、エネルギーをかけたわりには効果が表れないということもあるようである。

担任をした生徒と保護者には、思ったほどの効果がなかったかもしれない日刊学級通信『薫風』であったが、同僚の先生方には役に立ったかもしれない。私の書斎には、多くの先生方の製本された学級通信が並んでいる。どういうことかというと、製本された私の学級通信『薫風』を同僚に差し上げる。その後、その同僚が学級通信を発行し、製本する。そして、製本されたいろいろなタイトルの学級通信が私の手元に届くのである。私が日刊での学級通信を出していた中学校にいるうちに実践されたものもあれば、多くの先生方は次の学校にいってから実践したものである。私にとっては、宝物のような学級通信ライブラリーとなっている。

目の前に現れた採用２年目の青年教師に触発され、学級通信を毎日出すことになってしまった私ではあったが、学級通信はこの中学校で学級担任をした４年間で終わることになる。毎日出すことが決していいわけではないと薄々気付いていた私ではあるが、一度日刊にした以上は、続けるしかなかった。私にとって、毎日毎日Ａ４判１枚の原稿を作成するという営みは、日々考えることであり、文章を練ることであり、その時々の記録でもあった。教師の自己満足であることは否定できないが、自分のためになったことは間違いない。

私に刺激を与え、私の学級通信を日刊へと誘った青年教師と私が同僚だったのは、たったの１年間である。人との出会いは、期間の長さではなく、その濃さだと思う。憧れの先輩とのおつきあいもそうであった。その後の成長が非常に楽しみであった前途有望な青年教師は、その後も期待通りに、予想通りに成長し、今では指導主事として活躍している。これもまた、私にとってはうれしいことである。

考えてみると、あの中学校時代に同僚であった先生方、特に製本された学級通信を私に贈ってくださった先生方の多くが、教頭として、指導主事として、あるいはまもなく教頭となる人材として活躍されている。

たまたま出会った者同士が、互いに刺激し合い、成長していけるというのは、教員生活の醍醐味の一つだと考える。今思うと、私は同僚の先生方に恵まれていたようである。同じ学校で苦楽をともにした仲間が成長していく姿を見るのは、とても喜ばしいことである。教師の自己満足であった私の日刊学級通信ではあったが、結局毎日続けて良かったこともあったと思うのである。教員の皆さんには、教師の自己満足として思い当たる節はないであろうか。